
正義の柱

呉武鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義の柱

【Nコード】

N2173I

【作者名】

呉武鈴

【あらすじ】

罪を犯した男性は独房の中で、愛する妻を残して刑の執行を待っていた。

カツカツカツ

今日も同じ時間に誰かがこちらに向かつて歩いてくる。その足音が近づくと、私には少し身をこわばらせるようになっていた。

カツカツカツ…

やがてその足音が何事もなく私の牢屋の前を通り過ぎていくのを確認して身から力を抜き、読みかけであった本を手にとり堅く冷たい石の壁にもたれた。

カツカツカツ

毎日同じ時間に聞こえる足音に私は恐怖した。いつ私の牢屋の前でその音が止み、私をここから出すために手に縄を架けて壁の外にある『正義の柱』によつて私の命を一瞬で奪つてしまうことにはない。そのせいで最愛の妻を奪われてしまうのが恐かった。

カツカツカツ…

今日も私の牢屋の前で足音が止むことはなく暗闇の中に音は消えていった。外から吹き込んでくる風の音と、私と同じく『正義の柱』に架けられるのを待つ人間の安堵の息を聞きながら私は先程読みきった本を部屋の端に置き、数冊の中から寓話集を手にとり堅く歪んだベッドに腰をかけて読み始めた。

私は草原に一人であった。周りを見渡しても地平線があるばかりで太陽も月も雲も星もなかった。それでも空はいつもと変わらぬ青をしており何処までも澄みきっていた。

不意に名前を呼ばれた気がし、辺りを見渡すが何もなし。気のせいかな、と思うもやはり誰かが私の名前を呼んでいる。私が振り向くと同時に突風が吹き、咄嗟に目をかばった。

次に目を開けた時に見えたのは、轟轟と燃えている屋敷とその前で腰を抜かしている若かりし頃の『私』だった。それを見て私は目を反らしたくなつた。しかし私の意思は関係なく目は屋敷を捉え続ける。

屋敷が半分焼けて崩れた辺りで後ろから馬車に乗った屋敷の主人と妻が帰つて来た。それに気づき若かりし頃の『私』は振り向くが立つこともままならない。そこでまた突風が吹き、強制的に目を閉じさせられる。

そして目を開けた時には妻とは他の女性を抱いている『私』がいた。しかし『私』は何処か虚ろな目をしてその女を抱いていた。女はそれに気づかず一夜の享樂を楽しんでいる。そして一通り事が終わって女が寝たのを確認した『私』は台所からナタをもつてきてその女の頭めがけて思い切り振り下ろした。飛び散る血の中で『私』は何の感情もなく死体を見ていた。そして丁寧になタについた血を拭き取り元の場所に返すと『私』はしっかりとした足取りで窓を開けた。それと同時にまたも突風が吹いた。

そして私がいたのは暗い牢屋の中だった。辺りを見渡すがそこは私がある場所とは違い鉄格子の向こうには何も見えず風の音すら聞かない程寂しい場所だった。

『私』の異常な性癖を満たすために知り合い、仮染の愛を与え、一夜の享樂を末にその血肉を叩き切り、また何事もなかったかのように日常に戻る。

その繰り返しを楽しみ、人には知れぬ陰を忌み、真の愛を知らぬまま私はこの身が朽るまで狂いながら生きながられるのを覚悟していた。

しかし違った。

その先には私の覚悟を容易く覆した人がいた。

いつもと同じように仮染の愛を与え、一夜の享樂を末にその血肉を

叩き切る。それだけの筈だった。しかしあと一步のところで私の心に歯止めがかかった。この女を殺すのが惜しくなった。

それから毎日のように夜になると私は彼女を殺そうとしたが必ずあと一步のところで踏み止まった。偽りの愛しか知らない私に芽生えたのが真実の愛かどうかは分からない。しかし彼女がたまらなく愛しくなり、私は彼女を独占したくなつたのは事実だ。そしてその日を境に私の異常な性癖はなりを潜めた。

それから数年、私は彼女を本格的に妻として迎えた。そして私達の間には子供が生まれ、育ち、自立し、親としての義務を終えたことにより私と妻はただ老いるだけの人生を歩き始めた。

そこで目が覚め、辺りを見渡す。そこにあつたのは牢屋の隅に積まれた本と堅く冷たい石の壁だけだった。

カツカツカツ

毎日同じ時間に響く足音を聞きながら私は寓話集を読んでいた。

カツカツカツ…

不意に足音が止んだので顔を上げれば牢屋の前に監守が立っていた。

「やっこさんの番だ」

ただ一言だけ言うつと牢屋の錠を開け、外に出るように促した。

あの夢は私に過去に犯した罪を改めて悔いるように神が見せたのかもしれない。そう思いながら手に枷をはめられた私は数年ぶりに外に出た。広い道を歩き丘の上にある『正義の柱』まで着くとそこには今から始まる私の処刑を見るために多くの市民がいた。

滞りなく作業が進み、私の体は『正義の柱』に固定され後は無情の

刃が私の首を撥ねるだけになった。

「…最後に言い残すことはないか？」

刃を支える縄を掴んでいる処刑人が私に尋ねてくる。

「…妻よ。貴女は私を笑ってくれるか？」

私の遺言が妻に届いたかは分からない。しかしそんなことはどうでもいい。私はこれだけは言いたかった。そして時間がきて、処刑人の一言を合図に刃は支えを失い私の首を撥ねた。

その後一人の婦人が彼の首を抱き、涙を浮かべながら「愛する人の死を笑うことなんて出来ませんよ…」と呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2173i/>

正義の柱

2010年11月16日03時48分発行